



Title	明治後期の洋装本にみる書物形成：夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』初刊本の本文組版を中心とした一考察
Author(s)	吉羽, 一之
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 61-75
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56369">https://doi.org/10.18910/56369</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 明治後期の洋装本にみる書物形成 — 夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』初刊本の本文組版を中心 とした一考察 —

吉 羽 一 之

キーワード

書物形成, 組版, 活字, 明治後期, 『吾輩ハ猫デアル』  
Book design, Composition, Printing type,  
the late Meiji period, *Wagahai Wa Neko De Aru*

1. はじめに
2. 日本における洋装本の発端
3. 初刊本分析《書誌》
4. 初刊本分析《本文組版》
5. 明治後期のベストセラーの書物形成
6. まとめ

## 1. はじめに

1980年代からDTP（デスクトップパブリッシング）が普及し始め、それまでは印刷工程の中に含まれていた組版<sup>1</sup>という作業が印刷工程から切り離された。現在ではデジタル環境で組版作業を行うことが当然であり、年々、組版ソフトの操作も簡便化され、以前の植字工や組版工のような技能を持ち合わせていなくても、組版を行うことが可能となった。

DTPにおいては、活字もまた同様にデジタル化されており、印刷史研究会『本と活字の歴史事典』<sup>2</sup>の〈活字書体といえ、それは普通金属活字の書体を指している場合が多いのだが…中略…デジタル化された書体であっても、活字と呼んでいい。〉という記述より、デジタル化された活字は電子活字だと言える。また、電子活字の設計基準は金属活字と同じ基準によるもので、正方形の中に文字を設計するという基準が踏襲されている。とは言え、デジタル環境での組版作業では、小数点以下数桁までの微調整が可能であるため、基準を全く無視して感覚的な作業を行うことが可能である。しかし可読性の高さが求められる書物の組版にはルールが必要である。同じルールに従って組まれた紙面は情報の重要度に差が現れないが、活字サイズがそのルールから外れただけで、そこに情報の順位差が生じてしまう。組版ルールについて、野村保恵『編集者の組版ルール基礎知識』<sup>3</sup>に〈第一は、それを読む読者に読みやすく…中略…文字組版は読ませるため、読んでもらうためにつくられるものです。〉と記述されているこ

本稿は第222回研究例会（2015年5月16日、於：京都嵯峨芸術大学）での発表に基づく。

とからもその重要性が明らかである。しかし、組版ルールには普遍性はなく、書物の内容によっても、またその書物が刊行される時代の慣性や技術によっても、組版ルールは変化するものである。

本研究では、現在の組版技術やルールは、その歴史の中で研鑽された結果のものとした上で、現在の技術を用いた書物形成法<sup>4</sup>の構築を目的とする。本稿では日本における洋装本の揺籃期、明治38（1905）年に刊行され、現在、その書物形成に対して高い評価を得ている夏目漱石（以下、漱石）『吾輩は猫である』（以下『猫』）の初刊本<sup>5</sup>を分析対象とし、明治後期の洋装本の本文組版を中心に書物形成についての一考察を試みたい。

## 2. 日本における洋装本の発端

布川角左衛門は『本の周辺』<sup>6</sup>の中で、日本における洋装本の起源について〈伝来の発端については、徳川幕府が安政三（一八五六）年に洋学の教育研究機関として九段下に設立した蕃所調所にいたオランダ人からだという説がある。また、本格的な伝授は明治六（一八七三）年五月、当時の印刷局（のちの大蔵省印刷局）に製本師として雇われていたイギリス人パターソン（W. F. Patterson）によるもの〉だと述べている。つまり日本における洋装本の歴史は2015年現在、140年ほどである。

日本には中国にその発祥を持ち、平安時代に伝播された和装本という形成がある。和装本は、和紙の風合いもさることながら、その構造は単純で、綴じるために使用されている糸が劣化したとしても、その修復に専門的な技能は不要であり、和紙の強度による長期保存が可能といった利点がある。また印刷は整版<sup>7</sup>が主流である。中野三敏『江戸の板本』<sup>8</sup>には〈右の二種（整版・活字本）が我が国のいわゆる板本の九割以上を占める…中略…「整版本」がそのまた九割方を占めるであろう〉とある。和装本には肉筆性の高い文字が多く見られ、その文字は書字のようである。

和装本の外形と洋装本のそれとを比較すると、表紙に板紙を使用していないということから、片手に持って読むには書物そのものが柔らかいため、読むための台や机を必要とする。また裏移りを避けるため文字や図案が印刷されている面は片面で、印刷されていない面を内側にして頁が袋綴じにされているため、パラパラと軽く頁を送るということは難しい。一方、洋装本は書物の背を書棚に対して垂直に立てることができ、またその背からタイトルや著者名を確認することができるという点からも保管や管理がしやすい。つまり洋装本の普及によって結果的に書物はより身近なものとなった。

日本における本格的な洋装本の発端は紅野謙介『書物の近代』<sup>9</sup>に『改正 西国立志編』だという記述がある。『西国立志編』は、福沢諭吉『学問のすゝめ』と内田雅雄『輿地誌略』と

合わせて明治三書と呼ばれる啓蒙書である。自由民権運動、立身出世主義に目覚めた多くの若者を読者とした『西国立志編』は、改正前は和装11冊分冊で刊行されていたが、その外形を活字洋装本に改められ、明治10（1877）年に『改正 西国立志編』として刊行された。仕様は、判型が四六判（127×187mm）、版面の周囲に子持罫線、764頁の活版印刷である。しかし前田愛『近代読者の成立』<sup>10</sup>の記述によると、一時は「文部省年報」の「小学教科書一覧表」にそのタイトルが挙げられていたが、自由民権運動に対抗する政府の教育政策の変更により、明治13（1880）年に教科書リストから外されている。つまり日本初の純国産、本格的な洋装本の刊行は10年に満たなかったのである。

### 3. 初刊本分析《書誌》

『猫』は『改正 西国立志編』刊行から28年後に刊行された。30年近い時を経たことで印刷や製本の技術も少なからず発展したものと想像することができ、書物はより廉価で身近なものになっていたと思われる。また『猫』は雑誌の連載から単行本化されたことをふまえると、『改正 西国立志編』よりもさらに多くの読者層を獲得し、読む場所や時間など、当時の読書環境づくりに強く影響を与えたと思われる。

そこで、まずは初刊本を、書誌（初版印刷日・初版発行日、発行所、印刷所、収録作品、定価）、製本仕様・頁構成、装幀の項目で分析する。

- ・初版印刷日：[上編] 明治38（1905）年10月3日，[中編] 明治39（1906）年11月1日，  
[下編] 明治40（1907）年5月16日
- ・初版発行日：[上編] 明治38（1905）年10月6日，[中編] 明治39（1906）年11月4日，  
[下編] 明治40（1907）年5月19日

『猫』は、明治38（1905）年、高浜虚子が編集にあたっていた俳句雑誌『ホトトギス』に短編、読み切りとして発表された。単なる短編として掲載された『猫』は読者の続編希望に答え、連載となり、次いで単行本として刊行された。初刊本の表題は本稿の副題に示すように漢字カタカナ表記となっている。

『猫』の初刊本上編が刊行された明治38（1905）年の社会情勢を概観すると、4月、早稲田大学野球部が日本スポーツ界初の海外遠征を行い、阪神電車が大阪神戸間を20銭の運賃で開業したことなどが見られ、生活環境の向上が感じられる。前年から勃発した日露戦争において連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を撃滅したことで、大衆がその快勝に浮き足立つ中、9月に調印されたポーツマス日露講和条約に対して反対派の暴動が全国各地に広まり、生活環境向上の反面、安定した治安とは言い難い時世である。

出版情勢を見ると、明治以前は鎖国の時代とあって日本国内での文学が主流であったが、明

治以降は文明開化、近代国家の確立に基づき、明治4（1871）年の文部省設置や、それに伴う学校制度の発布で、読書の対象となる書物は娯楽本から啓蒙書や思想書へ移行していった時期と考えられる。さらには明治6（1873）年に始まった本格的な洋装本の製本技術の向上や、印刷用紙が楮や三桮を手漉きした和紙から、科学的に木材の植物繊維を分離させたパルプを機械漉きした洋紙へ移行したこと、そして、印刷方式が整版や木活字を使った木版印刷から金属活字を使った活版印刷へと洋式化したことで、書物をより廉価で製作することが可能となったため、啓蒙書などだけではなく、娯楽性の高い書物も洋装本という形成で刊行され、より多くの大衆読者が生み出されることとなる。このような移行時期の書物の外形について、大沼宜規『明治期における和装・洋装本の比率調査』<sup>11</sup>によると、明治元（1868）年の図書総計の中で和装本が占める率は96%だったが、徐々に低下し、明治20（1887）年には前年の42%から25%へと激減している。明治38（1905）年には9%となり、ほぼ洋装本へと移行していることがわかる。また分類別資料の文学の項目では明治元（1868）年には和装本が100%だったが、明治20（1887）年を機に激減し、明治38（1905）年には10%となっている。

これらの情勢調査に加えて、明治時代の読書環境を視覚的に知るために、画報の調査を行う。日本で初めて画報と名のつく明治22（1889）年創刊の『風俗画報』の中に、明治の習慣や風俗の一端を見ることができる。その中から書物や読書の風景が描かれている画像を検証し、当時の読書環境を考察する。

#### 図1 【131号（明治29・1896年）】

この図は、東京図書館閲覧室の図で、かなりたくさんの方が描かれている。読まれている書物の大半は、紙面の中が罫線で囲まれており、また手に持っている状態で頁が柔らかく開いていることから和装本だと推測される。描かれている書物の大半は和装本だが、机の上には所々に洋装本が置かれていることが確認できる。



図1 131号（明治29・1896年）『風俗画報』

書物の外形は大半が洋装本に移行していたこの時期だが、読むということにおいては、まだ和装本が主流である。

#### 図2 【218号（明治33・1900年）】

この図には帝国図書館尋常閲覧室が描かれている。読書をしている人は若い男性が多いようである。読者層を示す記述を永嶺重敏『〈読書国民〉の誕生』<sup>12</sup>から引用すると〈明治一〇年代から形成され始めた初期の図書館利用者公衆は、階層的には中産知識人層とその子弟たる学生、

性的には男性中心…中略…明治三〇年代後半からこの図書館利用者公衆の拡大が始まる。)とあるため、図に描かれている男性は、その姿格好から学生が大半だと思われる。読まれている書物は和装本が多いようだが、図の手前右側の机の上に洋装本が二冊置かれている。また、図の手前左で立っている男性が手に持っている書物は固い表紙が描かれていることから洋装本だと思われる。さらに受付左のガラス戸の書棚には書物が立てて保管されていることから、これらは洋装本であり、保管状況から貴重な書物だったのではないかと推測できる。



図2 218号 (明治33・1900年) 『風俗画報』

図3 【221号 (明治33・1900年)】

この図は [図2 【218号】] と同様、帝国図書館の図だが、ここには特別室と婦人室が描かれている。読まれている書物は和装本、そして女性の読書風景ということがこの図の特徴である。画面右には書見台にかなり大型の洋装本が開かれている状態が描かれており、大型の洋装本の存在が確認できる。

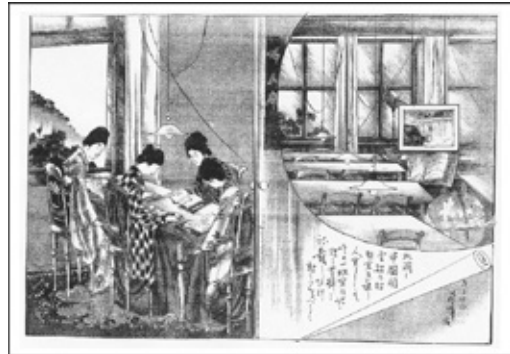


図3 221号 (明治33・1900年) 『風俗画報』

図4 【379号 (明治41・1908年)】

この図は読書環境を示す図版資料の中で、最も当時の読書風景を正確に描いたものではないだろうか。食事の準備をしながら新聞を読む、夜のくつろぎの時間に子供たちに囲まれながら本や雑誌が読まれている。



図4 379号 (明治41・1908年) 『風俗画報』

図5 【409号 (明治43・1910年)】

この図の特徴は子供が本 (和装本) を読んでいるという点である。部屋の調度などからおそらく上流階級の家庭での読書風景だと思われるが、子供も読書が可能となっていることに注目できる。



図5 409号 (明治43・1910年) 『風俗画報』

以上の図より、明治中期から後期の読書層は和装本を中心に男性だけでなく、



女性そして子供にも拡大しており、また図書館や自宅でじっくり座って読む、新聞や雑誌は「ながら読み」されていること、そして書物の外形は、読むことにおいては和装本が多いことが確認できた。

・発行所：大倉書店・服部書店

大倉書店の前身は、鈴木省三『日本の出版界を築いた人びと』<sup>13</sup>によると、天保4（1833）年に絵草紙の出版・販売を主として創業された錦栄堂である。また、岩切信一郎氏の研究によれば、明治8（1875）年9月15日に大倉孫兵衛が大倉書店として創業を開始している。大倉孫兵衛は出版・販売業に加えて、明治22（1889）年に大倉孫兵衛洋紙店を開設している。大倉書店から刊行された書物は辞書類が多く、二代目店主・大倉保五郎により、落合直文編『ことばの泉』という国語大辞典が明治31（1898）年に刊行されている。

服部書店は創業年が確定できないが、店主・服部国太郎は元大倉書店番頭で、明治30年代に大倉分店服部書店と名乗り、末年には服部書店となっている。岩切氏の調査<sup>14</sup>による《服部書店出版書籍目録（抄）》には『猫』以外に漱石『濠虚集』（明治39（1906）年5月17日発行）や漱石原作・安藤貫一訳『I・AM・A・CAT』が確認できる。

・印刷所：秀英舎

秀英舎は、現在の大日本印刷株式会社の前身である。明治9（1876）年10月9日に佐久間貞一によって創業され、創業当初は、現在の活字史において、秀英舎と合わせて二大潮流と言われている東京築地活版製造所から活字を購入し、印刷を行っていた。前掲の『改正 西国立志編』も秀英舎で印刷されたものである。

・収録作品：[上編] 第1章～第5章，[中編] 第6章～第9章，[下編] 第10章～第11章

収録されている章数を見ると、上編に5章分、中編に4章分が収録されているが、下編が2章分と少ない章数となっている。

・定 価：[上編] 95銭，[中編] 90銭，[下編] 90銭

前述の通り、明治38（1905）年に開業した阪神電車の大阪神戸間の運賃が20銭で、その他の当時の物価は、『物価の文化史事典』<sup>15</sup>によると、米が白米中級品10kgで1円17銭7厘、かけうどん・かけそばが3銭5厘、銭湯が大人一人3銭、東京大学入学年次の一カ年分の学費が35円である。

・製本仕様：紙装・角背・突きつけ・カバー付・天金・アンカット・糸綴じ・タイトバック

・頁構成：[上編] 絵・扉・序文3頁・本文290頁・奥付・本文中に挿画6葉（中村不折画）

[中編] 絵・扉・序文8頁・本文238頁・奥付・本文中に挿画3葉（浅井忠画）

[下編] 絵・扉・序文2頁・本文218頁・奥付・本文中に挿画3葉（浅井忠画）

各編で章数に差があったことは前項で述べたが、中編は4章分で本文が238頁、下編は2章

分のみの掲載だが、本文は218頁となっている。これは後述するが、行数の設定が上・中編と下編で変更されていることが原因である。

また挿絵の画家が上編と中・下編では違うが、小田切靖明・榊原鳴海堂『夏目漱石の研究と書誌』<sup>16</sup>によると〈漱石は明治三十九年一月一日、橋口五葉宛書簡で「不折は無暗に法螺を吹くから絵をたのむのがいやになりました」と書いており、中村不折を嫌っている。〉という記述より、その理由が確認できる。

・装幀者：橋口五葉 [図6]

橋口五葉は、漱石と親しかった長兄の橋口貢を通して、漱石と水彩画の絵葉書の交換をきっかけに雑誌『ホトトギス』の挿絵を描くようになり、漱石より『猫』上編の装幀を頼まれ、装幀家としての道を歩み始めた。橋口五葉は浮世絵の影響を受けた木版画家とされているが、図録『生誕130年 橋口五葉展』<sup>17</sup>の解説に〈装幀の仕事は装飾美術であり…後略（「思ひ出した事ども」『美術新報』、一九一三年三月）〉という引用があり、また大貫伸樹『装丁探索』<sup>18</sup>の中に引用されている〈製本装幀の最も美術的な物は、装幀家が材料に支配されずに、むしろ材料を善用して其芸術的目的をよく表現した物にある…中略…装飾的の形式に依って自己の芸術を表現する事が、自分に最も便利な表現法だと経験している、作家には注目す可き仕事であると思う（初出『美術新報』一九一三年第五号、「思ひ出した事ども。」）〉という記述からも、橋口五葉は装幀を画家の副業としてではなく、装幀そのものを作品表現と考えていたことがわかる。



図6 初刊本・カバーと表紙

#### 4. 初刊本分析《本文組版》

『猫』の初刊本を、判型と本文組版（版面、活字サイズ、活字書体、字間、行間、字数、版面面積率、禁則処理法）という観点から実測する。実測には日本近代文学館の復刻本「新選名著復刻全集」を用いる。明治に刊行された初刊本は現在入手が困難な上、少なからず破損していることが想像され、修復されていたとしても修復時の小口断裁による判型の変形が懸念される。日本近代文学館の復刻版は付録『吾輩ハ猫デアル』解説に〈復刻制作の基本理念は、一貫して「原本の元の姿を再現して伝える」という点にある。…中略…一般的にいわれている複製ものの概念よりさらに厳密な基準によっており、単なるコピーとは明らかに異なる。…中略



…原本との異質なイメージを読者に与えることは厳しく避けなければならない。〉とある。復刻版は初刊本の初版だけでなく重版も多数精査し、堅牢さと開きやすさは調整されているものの違和感のない程度だという理由から、本稿において初刊本の現物を実測することと差異はないと判断する。

・判型：148×225mm（菊判の近似値）

この判型は菊判（152×220mm）の近似値であり、和装本の半紙本と呼ばれる判型（約150～170×220～240mm）に近いものである。前掲の『江戸の板本』<sup>19</sup>に〈江戸期を通じて板本の最も普通の型〉と記述されていることから、『猫』の判型は用紙の制約もあったと想像できるが、それまでの習慣性に従った判型が選択されたと考えられる。

・版面：〔上編〕天38mm・地39mm・ノド28mm・小口30mm

〔中編〕天34mm・地44mm・ノド26mm・小口30mm

〔下編〕天38mm・地39mm・ノド28mm・小口30mm

版面の周囲の余白は数頁の計測の平均値を算出している。各頁の計測の誤差は印刷や製本工程を考慮し、許容範囲とする。中編の地の余白は他編に比べると広く、中編の版面は少し紙面の上方に配置されているが、上・下編は紙面のほぼ中央に版面が配置されていることから、版面の天地の位置に意識的な配慮はなかったと推測できる。

・活字サイズ：五号（3.690mm，14.76級，10.5pt）〔図7〕

当時の本文は五号活字が使用されるものが多く見られる。『猫』にも五号サイズの活字が使用されているが、活版印刷の技術的制約から本文には五号を使用するしか選択肢がなかったと言える。さらに言えば、活字サイズが限定されるということで、当時、本文に見る活字サイズ、五号が習慣として定着することになったのではないだろうか。

・活字書体：秀英舎明朝五號〔図7〕

使用されている活字を、秀英舎の活字製造部、東京製文堂が明治36（1903）年2月11日に発行した『活字見本帖 Type Specimens』<sup>20</sup>に掲載されている「明朝五號」の活字と比較すると、形状が一致する。

秀英舎は、創業当時は東京築地活版製造所から活字を購入していたが、明治14（1881）年から自社で活字の製造を開始し、数回の改刻の後に独自の活字を完成させている。これが秀英体と呼ばれる活字である。東京築地活版製造所の活字は築地体と呼ばれている。活字の印象は、築地体はどっしりとした男性的



図7 初刊本・活字

もので、それに対して秀英体は柔らかく角のとれた女性的なものである。

・字間：四分アキ [図8]

金属活字版印刷以前の印刷で使われていた文字は書字のような肉筆性の高いものであった。金属活字で印刷された紙面は文字が一文字ずつ途切れており、文字の肉筆性は薄らいでいる。字間四分アキという設定は、金属活字以前の文字の筆脈が損なわれないための配慮だったのではないかと考えられる。また技術的な側面から考察すると、日本語組版には行頭や行末に約物が組み込まれてしまう禁則事項を処理する必要があるが、字間に四分スペースを挿入しておくことで、その処理が簡便化されると考えられる。

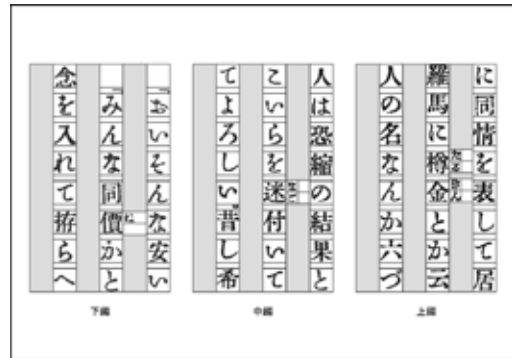


図8 初刊本・字間と行間

・行間：全角アキ [図8]

行間全角アキという設定は、まず読み進めている行を見誤らないためと、もう一つはルビ（振り仮名）活字を本文活字の右側に組むためだと思われる。ルビ活字は基本的に本文活字の半分のサイズが使用される。そのためルビの挿入には行間に最低半角のスペースが必要となる。

・字数：[上編] 1行32文字詰め・1頁14行・1頁448文字

[中編] 1行32文字詰め・1頁14行・1頁448文字

[下編] 1行32文字詰め・1頁13行・1頁416文字

下編だけが行数の設定が他編と比較すると1行少ないが、これは下編の収録作品の章数が少ないことにより、頁数が少なくなり書物の厚みが他編に比べて極端に薄くなることを避けるための設定だと考えられる。

・版面面積率：[上編] 40%，[中編] 40.6%，[下編] 40.6%

版面面積率とは、判型に対して版面がどれくらいの大きさかを示した数値である。前掲の『編集者の組版ルール基礎知識』<sup>21</sup>の中に、〈本文が配置される場所、つまり版面は書体や字間、行間、さらには製本方法や紙質などあらゆるものが影響するため基準値とはならないが目安として一般的には、判型面積に対して版面面積は45～60%〉と記述されている。初刊本の版面面積率は目安より小さい値を示している。

・禁則事項の処理：字間四分スペースと四分の約物活字の入れ替え・ぶら下がり

句読点や鍵括弧が四分活字として文字間に挿入されていることから、句読点や鍵括弧がない箇所には四分のスペースを、句読点や鍵括弧があればスペースではなく、それらの四分活字を

組むことで禁則事項が処理されている。

## 5. 明治後期のベストセラーの書物形成

第4章の、初刊本の本文組版を中心とした実測調査により、その設計が明らかになったが、比較として、初刊本刊行と同時期の刊行物を調査し、初刊本の設計がこの時代において特殊なものだったか否かを考察したい。

比較調査の対象として、出口一雄『出版を学ぶ人のために』<sup>22</sup>にベストセラーとして掲載されている尾崎紅葉『金色夜叉』、島崎藤村『破戒』、漱石『鶉籠』に加えて、大倉書店・服部書店から刊行された漱石『漾虚集』と、岡野他家夫『日本出版文化史』<sup>23</sup>に〈当時のわが青年作家達から感激を以て愛読されたのだった。〉と紹介されている森鷗外『即興詩人』を取り上げる。分析手法は初刊本と同様である。分析項目の判型・版面面積率・活字サイズ・字間・行間・字数（一行の字詰・行数・頁文字数）は『造本の科学 上 造本編』<sup>24</sup>より明治後期の本文組版を調査した資料と合わせて〔表1〕にまとめる。禁則事項の処理については省略する。

分析報告の前に、本章で取り上げた比較調査対象は、島崎藤村『破戒』と漱石『漾虚集』以外の発行所が春陽堂であるため、春陽堂について少し触れておきたい。

塩澤実信『出版社大全』<sup>25</sup>によると、春陽堂は〈和田篤太郎が、明治十一年（一八七八）に神田泉町に本の小売兼行商を開業し…〉とあり、また前掲の『日本の出版界を築いた人びと』<sup>26</sup>には〈書下しシリーズに新人紅葉を起用した先見の明〉という見出しや〈第一次大戦が終結した翌年大正八年（一九一九）の春…中略…そのころ春陽堂は、文芸図書の日本一の大出版社であった。尾崎紅葉をはじめ、森鷗外、坪内逍遙、夏目漱石、小杉天外、島崎藤村、永井荷風、菊池寛など、日本文学の主流をなす人びとの名著が、ずらりと揃って、ここから出版されていたのである。〉と記述されていることから、春陽堂は文芸書の代表的な出版社であると言える。

### 比較分析①《金色夜叉》

『金色夜叉』は前編、中編、後編、続編、続々編の5冊で刊行されているが、本文は前編と続編が同じ設計で、中編、後編、続々編が同じ設計であるため、分析は前編と中編で行う。初版印刷日：〔前編〕明治31（1898）年7月3日／〔中編〕明治31（1898）年12月29日、初版発行日：〔前編〕明治31（1898）年7月6日／〔中編〕明治32（1899）年1月1日、発行所：春陽堂、印刷所：東京印刷株式会社、定価：〔前編〕60銭／〔中編〕40銭、製本仕様：クロス装・丸背・みぞつき・糸綴じ・タイトバック、頁構成：〔前編〕扉・絵・本文164頁・広告6頁・奥付・広告／〔中編〕扉・絵・本文199頁・奥付・広告、装幀者：不明、活字書体：〔前編〕東京印刷四号／〔中編〕東京印刷五号

### 比較分析②《即興詩人》

初版印刷日：明治35（1902）年8月29日，初版発行日：明治35（1902）年9月1日，発行所：春陽堂，印刷所：東京印刷株式会社，定価：上・下各60銭，製本仕様：クロス装・丸背・みぞつき・カバー付・糸綴じ・タイトバック，頁構成：[上]扉・例言・目次3頁・本文213頁・奥付・広告3頁／[下]扉・目次3頁・本文220頁・付録（即興詩人不翻語一覧）23頁・奥付・広告3頁，装幀者：不明，活字書体：東京印刷四号

### 比較分析③《破戒》

初版印刷日：明治39（1906）年3月20日，初版発行日：明治39（1906）年3月25日，発行者：島崎春樹（自家版），印刷所：秀英舎，定価：70銭（郵税金8銭），製本仕様：紙装・角背・突きつけ・糸綴じ・タイトバック，頁構成：序・挿絵（鍋木清方画）・扉・挿絵（鍋木清方画）・本文578頁・奥付・本文中に千曲川流域之図2頁，装幀者：不明，活字書体：秀英舎明朝五號

### 比較分析④《漾虚集》

初版印刷日：明治39（1906）年5月14日，初版発行日：明治39（1906）年5月17日，発行所：大倉書店・服部書店，印刷所：秀英舎，収録作品：倫敦塔・カーライル博物館・幻影の盾・琴のそら音・一夜・薤露行・趣味の遺伝，定価：1円40銭，製本仕様：布装・角背・みぞつき・天金・アンカット・糸綴じ・タイトバック，頁構成：絵・扉・序文2頁・目次・本文302頁（各作品に前扉）・絵・奥付・広告2頁・各作品中に挿画一葉（中村不折画），装幀者：橋口五葉，活字書体：秀英舎明朝五號

### 比較分析⑤《鶉籠》

初版印刷日：明治39（1906）年12月29日，初版発行日：明治40（1907）年1月1日，発行所：春陽堂，印刷所：帝国印刷株式会社，収録作品：坊っちゃん・二百十日・草枕，定価：1円30銭，製本仕様：紙装・角背・みぞつき・カバー付・糸綴じ・タイトバック，頁構成：扉・序文2頁・本文502頁（各作品に前扉）・奥付，装幀者：橋口五葉，活字書体：秀英舎明朝五號

[表1]は実測した結果の中から，本文組版に焦点を当てた数値のみをまとめている。まず判型については，大半が和装本の半紙本と呼ばれる判型に近似のサイズである。つまり，製紙や製本工程によるサイズの不統一があるものの，おおよそ半紙本という習慣性が明治にも引き継がれているものと思われる。版面面積率については『即興詩人』が版面の外に罫線があり版面が大きく設計されているものの，その他は約30%から50%である。ちなみに平成23（2011）年に刊行された文春文庫版『猫』の版面面積率は72.42%である。一行の字詰の設定は，活字サイズ五号のみに注目すると，おおよそ30字～40字程度であり，行数は平均13.5行である。現在刊行されている書物と比較すると，明治期の書物は版面面積がかなり小さいことが明らか

表1 分析一覧

	判型【左右×天地】 (mm)	版面面積率 (%)	活字サイズ (号)	字間 (アキ)	行間 (アキ)	一行の字詰 (字)	行数 (行)	頁文字数 (字)
夏目漱石『吾輩ハ猫デアル(上巻)』	148×225*	40	五号	四分	全角	32	14	448
尾崎紅葉『金色夜叉(前編)』	156×228*	33	四号	ベタ	全角	24	11	264
尾崎紅葉『金色夜叉(中編)』	156×228*	34.7	五号	四分	全角	26	13	338
森鷗外『即興詩人』	168×231	72.8	四号	ベタ	全角	41	15	615
島崎藤村『破戒』	130×188	50.3	五号	ベタ	全角	36	12	432
夏目漱石『漱虚集』	159×222*	41.9	五号	四分	全角	32	14	448
夏目漱石『精籠』	152×222*	49.4	五号	四分	全角	33	14	462
幸田露伴『露田々』	—	—	五号	四分	全角	38	15	570
北村透谷『蓬莱曲』	—	—	四号	ベタ	五号全角	36	13	468
尾崎紅葉『三人妻』	—	—	五号	二分	全角	33	15	495
幸田露伴『ひげ男』	—	—	五号	四分	全角	32	13	416
幸田露伴『三保物語』	—	—	五号	二分	全角	27	13	351
上田敏『文芸講話』	—	—	五号	四分	全角	35	14	490
夏目漱石『三四郎』	—	—	五号	四分	全角	33	14	462

\*菊判(152×220mm)の近似値

だが、これは当時の組版や印刷技術の制約の結果ではないだろうか。また活字サイズや字間、行間の設定も金属活字版印刷という技術的な制約が大きいと推測される。

## 6. まとめ

『猫』の初刊本は現在、明治後期に刊行された美しい書物として高い評価を得ているが、それは少なからず現在刊行されている書物にはない組版への評価のように思われる。また、検証は今後の課題となるが、当時使用されていた活字サイズは認知心理学的見地から算出された眼球能力への適正値<sup>27</sup>にも近接するものであり、無意識的に読みやすい、つまりはストレスなく心地よいと感じる紙面なのではないだろうか。とは言え、『猫』が得ている高い評価は現在の視点からの評価であり、第5章の比較分析から考察すると、『猫』の本文組版は刊行当時、決して特殊なものではなく、[表1]の実測項目の全てが平均的な数値を示している。つまり、技術的な制約の中で、第3章で明らかになった明治前期から中期の和装本の習慣性が踏襲された一般的なものだと言えるであろう。また技術的な制限があったが故に、当時の本文組版が新たな習慣として、過去の習慣の上に累積していく様相が伺える。

本稿では『猫』の初刊本を手がかりに、明治後期に刊行された書物を考察したことにより、明治以前からの習慣性が、明治以降の技術によって保たれようとした結果の形成を見ることが

できた。今後はさらに時代を進め、大正から昭和初期に刊行された『猫』と、同時期に刊行された書物を分析し、現在の技術を用いた『猫』の形成が検討できるように本稿と同様に『猫』を手がかりとし、本文組版の変遷についての考察を深めていきたい。

## 註

- 1 [組版] composing, composition; 活字・込め物・罫線などを組み合わせて版を作る作業。(日本印刷学会『印刷事典』印刷学会出版部 1987年 p.122)
- 2 印刷史研究会『本と活字の歴史事典』柏書房 2000年 p.4
- 3 野村保恵『編集者の組版ルール基礎知識』日本エディタースクール出版部 2004年 p.21
- 4 [書物形成法]; 左記の文言は、片塩二郎『文字百景059 書籍形成法の未来「読めますか、読めますか」スタンリー・モリスンとオクタボの立場』p.10の〈書籍形成法つまりタイポグラフィを…〉という記述と、前掲の『印刷事典』の〈[タイポグラフィ]: 活版印刷の体裁…中略…の選定の良否をいう。〉という記述を根拠として筆者が生成した文言である。また『出版事典』(出版ニュース社1971年)の[書籍]の項目に〈同義語として日常語になっている本、書物…中略…などがある。…中略…出版物の類や形態の上から意味を限定し、新聞、雑誌などと区別する〉とあるため、本稿では研究対象が局所的になることを避けるため、書籍ではなく、書物という用語を用いることとする。
- 5 本稿では、初刊を世に初めて刊行された書物、初版をその書物の最初に出版された書物と定義し、明治38(1905)年に単行本として世に初めて刊行されたものを『猫』の初刊本とする。
- 6 布川角左衛門『本の周辺』日本エディタースクール出版部 1979年 p.21
- 7 [整版]; 字、又は絵、又は図を、板木に逆文字などで彫り込んで、その面に墨を塗って、その上に用紙の表をあてて、刷り上げてまとめた本。(長澤規矩也『図書学辞典』三省堂 1979年)
- 8 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店 1995年 pp.28-29
- 9 紅野謙介『書物の近代 メディアの文学史』筑摩書房 1992年 p.23
- 10 前田愛『近代読者の成立』岩波書店 2001年 p.123
- 11 大沼宜規「明治期における和装・洋装本の比率調査——帝国図書館蔵書を中心に」(『日本出版資料』8 2003年 pp.126-153)
- 12 永嶺重敏『〈読書国民〉の誕生 明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディタースクール出版部 2004年 pp.233-234
- 13 鈴木省三『日本の出版界を築いた人びと』柏書房 1985年 pp.29-34
- 14 岩切信一郎『「吾輩ハ猫デアル」(夏目漱石著)の出版事情——著者・編集出版社』『東京文化短期大学紀要』第15号 1997年 pp.50-51
- 15 森永卓郎監修『物価の文化史事典 明治・大正・昭和・平成』展望社 2008年 p.120 p.272 p.315
- 16 小田切靖明・榊原鳴海堂『夏目漱石の研究と書誌』ナグ出版センター 2002年



- 17 図録『生誕130年 橋口五葉展』東京新聞 2011年
- 18 大貫伸樹『装丁探索』平凡社 2003年 p.16
- 19 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店 1995年 p.61
- 20 片塩二郎『秀英体研究』朗文堂 2004年
- 21 野村保恵『編集者の組版ルール基礎知識』日本エディタースクール出版部 2004年 p.68
- 22 出口一雄『出版を学ぶ人のために』第一書店出版部 1975年 pp.173-177
- 23 岡野他家夫『日本出版文化史』春歩堂 1960年 p.199
- 24 『造本の科学 上 造本編』日本エディタースクール出版部 1982年 pp.67-70
- 25 塩澤実信『出版社大全』論創社 2003年 pp.25-26
- 26 鈴木省三『日本の出版界を築いた人びと』柏書房 1985年 p.49
- 27 今井直一『書物と活字』印刷学会出版部 1966年 pp.72-77〈人間の眼球の能力における文字の大きさと距離の関係は5mの距離から65mmの大きさの文字が最も読みやすい。読書に適した眼から紙面までの距離は24cm～30cm。これらの数値より、読書における活字サイズと眼から紙面までの距離を換算すると、20cmで7.5pt(10.5級)、30cmで11pt(15.5級)〉という記述がある。

#### 図版資料

植田満文監修・編 大串夏身・横山泰子編『風俗画報』CD-ROM版 Ver.2 ゆまに書房 2002年  
初刊本：新選名著復刻全集『吾輩ハ猫デアル』日本近代文学館 1970年

